令和6年度 第2回藤沢市部活動推進協議会 会議録

1 開催日時

2024年11月1日（金）15時00分～17時00分

2 開催場所

市役所本庁舎8階 会議室8-1、8-2

3 委員および出席者

【委員】

	氏名	所属	出欠
1	池田 敏和	横浜国立大学教育学部	出席
2	新屋敷 正隆	元藤沢市立中学校長・部活動指導員	出席
3	吉野 勝	藤沢市文化団体連合会	出席
4	林 良雄	藤沢市体育協会	出席
5	谷口 三千也	藤沢市スポーツ少年団	出席
6	太田 修二	藤沢市民交響楽団	出席
7	滝内 洋子	藤沢市学校・家庭・地域連携推進協議会長会	出席
8	福家 大輔	藤沢の子どもたちのためにつながる会	欠席
9	櫻井 光	特定非営利活動法人藤沢市民活動推進機構	欠席
10	神原 勇人	公益財団法人藤沢市みらい創造財団	出席

11	山田 大	御所見中学校（藤沢市中学校体育連盟副会長）	出席
12	長田 光子	元藤沢市立中学校長（吹奏楽）	出席
13	岸 寛人	高浜中学校（藤沢市中学校体育連盟理事長）	出席
14	池上 喬之	明治中学校（吹奏楽）	出席

【事務局】

	氏 名	所 属
1	川口 浩平	教育部 部長
2	坪谷 麻貴	教育部 参事
3	丸谷 英之	教育指導課 課長
4	平田 憲司	教育指導課 主幹
5	野口 博史	教育指導課 指導主事
6	岸本 有香子	教育指導課 主査
7	加藤 財英	教育総務課 参事
8	一柳 善彦	教育総務課 主幹
9	清水 航介	学務保健課 課長補佐
10	浅上 修嗣	生涯学習総務課 主幹
11	浅野 智一	スポーツ推進課 課長
12	森本 琢実	文化芸術課 課長補佐
13	内田 匡紀	文化芸術課 主任

【当日の記録】

事務局：池田会長より開会の挨拶をお願いします。

会 長：こんにちは。前回第1回協議会から2ヶ月ぐらい経とうとしております。その間、アンケートの実施や分析等、ありがとうございました。皆様もアンケート結果を見られたと思いますが、とりあえずプリントアウトしてから見ようと思っていたら全然プリントが終わらなくて、いかに膨大な意見が出されたのかと驚かされました。けれどもその分、保護者の方も生徒の人たちも、本当に思いがいっぱい詰まっているのだなと思ったところです。改めてこの協議会の重要さを噛みしめたところです。今日はぜひまた皆様から忌憚のないご意見をいただきながら、我々にとって何ができるのかを考えていければと思います。どうぞよろしく願います。

事務局：それでは続きまして次第の2、第1回藤沢市部活動地域移行推進協議会会議録（案）に移ります。資料冊子の3ページをご覧ください。3ページから28ページまでが、第1回の協議会会議録の案をお示ししております。ご自身のご発言箇所を確認していただき、何か異なる文言がありましたら、11月15日頃までに事務局宛てにお知らせいただきたいと思いますので願います。ここで、27ページの会議録をご覧いただきたいと思います。27ページの中段に、前回の協議会の最後のところで委員からいただきました、教員の兼職兼業等に係るご質問についてのご質問にお答えしたいと思います。『教員が他市町を含む他校の部活動指導員や外部指導者をする事は、労働条件の問題に抵触するのか』というご趣旨のご質問をいただきました。この質問につきましては、教員の服務に係る回答を事務局・学務保健課より、中学校体育連盟に係る内容については事務局・教育指導課よりそれぞれ回答させていただきます。

事務局：学務保健課です。労働基準法では指導者が原則として1日に8時間、1週間に40時間を超えて労働させてはならないと定めております。公立学校の教員は地方公務員となります。労働基準法が適用されておまして、1日に7時間45分、1週間に38時間45分が労働時間として定められていますことと、部活動指導員は会計年度任用職員という身分になるということとを鑑みますと、教員が部活動指導員を兼職するということは労働条件の問題に抵触をするということが言えるかと思えます。本市の外部指導者につきましては、有償ボランティアという身分になりますことから、兼業兼職の手続きをしていただくことで謝礼等を受け取ることができます。また労働条件の問題の抵触ではないのですが、中学校の教員が仮に部活動指導員や外部指導者という立場で、他校の部活動を指導するということは、教員というその職業を考えますと、社会通念上から現実的ではないのと考えております。

事務局：続きまして中学校体育連盟の視点からも補足としてお話をさせていただきます。神奈川県中学校体育連盟の規定で、他校の中学校長・中学校教職員は中学校体育連盟主催の新人大会と総合体育大会においてコーチとして認めない、ベンチ入りできないと定められております。なお、他校種の教員はその限りではないという規定がされておりますので、例えば小学校の先生が中学校の、高等学校の先生が中学校体育連盟主催大会のベンチに入るということは実際ございますので、そのようにご理解いただければと思います。以上、学校保健課、教育指導課からそれぞれご回答させていただきましたけれども、委員いかがでしょうか。先日のご質問に回答できているかどうかというところでご確認いただきたいと思います。

委員：詳しくありがとうございます。そんなに難しい質問をしたつもりではないのですが、部活動指導員とか外部指導者という言葉があり、いろいろな制度の中で、私の方で混乱してしまい質問がおかしかったのかと思います。聞いたかったのは、今のスキームの中で、土日に指導を行うタイプの指導者に、別の中学校に勤めている人とかはできないのかということです。会計年度任用職員の話もありましたが、平日に入っている方とか、一部限定されているのではないかなと思います。今、試行で行っている土日の地域指導者はボランティアベースになってしまっていると思いますが、そういう指導者は本当にできるのかなというのと、社会通念上というお話がありましたが、どういう社会通念なのかというのがわからなかったですね。要するに、自校の部活動ではなく他校の部活動をやるのがいかなものかという社会通念なのかなと感じましたけれども、ボランティアベースでもやってはいけないのかなというのが疑問でした。

事務局：まず38時間45分という労働時間、勤務時間は40時間を上回っていないわけですが、会計年度任用職員として、土日に部活動指導員で指導する時間が、極端な話、毎週1時間なのであれば、39時間45分なので、40時間を超えませんが、でも実際にその正規の教員が他の会計年度任用職員を兼務するっていうのは現実的には難しいです。

委員：会計年度任用職員の話は言及していません。今の試行で土日にやってもらっている地域指導者の方は、会計年度任用職員になるのですか。

事務局：部活動指導に関しては会計年度任用職員という身分になると確認しております。

委員：土日はボランティアもOKということですか。

事務局：極端な話、社会通念上というところのお答えになるかと思いますが、ボランティアであれば数学の先生が他校で数学を教えているのかという話です。やはり公平性ですとか、諸々考えたところで、学校の生徒や保護者の感覚からしますと、あの先生がある種目の専門だけど、うちの部活じゃなくて、他校の部活を見ている

という声が上がってくるということが想定されます。こちらで把握していること
で言うと、他校ではなく地域で作ったクラブチームの指導を学校の教員が行って
いる例は他市ではございます。ただ部活動を他の学校の部活動を指導するという
ことについては、なかなか理解を得るのは難しいのではないかなというふうに考
えております。

委 員：議論してもしょうがないのでわかりました。

事務局：この部活動の地域移行の話が進んで、その進展に応じた制度まで行かなくても新
しい理解というものも伴ってくるのかなというところまでしか、本日のところ
では述べられないところもございます。委員からご指摘いただいたところも、また
今後検討する1つに入ってくるのかなというところもでございます。回答になっ
ていないところもあったかもしれませんが、このあたりで一度この話は区切りとさせ
ていただきたいと思います。ありがとうございます。それではここからの進行
につきましては、会長にお願いしたいと思います。どうぞよろしく願います。

会 長：それでは次第に従って進めさせていただきます。まず3番の報告ということで、
藤沢市部活動アンケート結果について事務局からご説明をお願いいたします。

事務局：それでは資料「令和6年度藤沢市部活動アンケート結果」をご覧ください。委員
の皆様には事前にアンケート結果を送付させていただきましたが、改めましてア
ンケート結果について事務局からご説明させていただきます。本部活動アンケ
ートは本市の部活動のニーズと課題をつかむことを目的として、9月17日以降9
月30日を締め切りとした約2週間の中で、各中学校の状況等に応じて実施して
いただきました。今回、校長向け、教員向け、中学校1・2年生向け、その保護
者向けの4種類のアンケートを行いました。校長向けアンケートは19校全ての
校長先生からご回答いただきました。教員向けアンケートは、市内の中学校教員
約600名余りのうち、302名の先生方からご回答いただきました。中学校
1・2年生向けアンケートは、市内の中学校1・2年生約7,000名余りのう
ち、4,190名からご回答いただきました。中学校1・2年生の保護者向けア
ンケートは2,271名からご回答いただきました。2週間ほどの回答期間、そ
して大変お忙しい中多くの皆様から本アンケートにご協力いただきましたこと
を、この場を借りて厚く御礼いたします。自由記述については、本日の資料では
主な意見を集約した形で掲載しておりますのでご承知おきください。ここで協議
会資料の29ページをお開きいただきまして、『第1回推進協議会の委員意見と
藤沢市部活動アンケート結果から』をご覧くださいと思います。第1回の協
議会でのご協議では、委員の皆様から「校長アンケートの結果について注目して
いる」というご意見をいただきました。主な意見として、「学校運営をしている

校長の立場から、現状を踏まえた回答はこの先制度や仕組みを作っていく上で大変重要である」、「俯瞰的に見た意見としての自由記述は注視したい」、「今の校長は将来見通しをどう考えているのかがわかるといい」など、ご意見をいただいたところでございます。29ページから32ページにかけて、校長向けアンケートの自由記述をまとめてございます。29ページの質問6『質問5「国は学校部活動を地域に移行すると示しています。その第一段階として平日は学校部活動(指導者は教員)、休日は地域クラブ活動(指導者は地域指導者)と示されていますが、このことについてどう考えますか」を回答した理由やお考え等がありましたらお書きください。』、30ページの質問8『質問7「学校部活動において、部活動指導員や外部指導者の活用は必要なことだと思いますか」を回答した理由やお考え等がありましたらお書きください。』、30ページ中段の質問12『質問11「今後、学校部活動は学校運営上必要だと思いますか」で回答した理由やお考え等ありましたらご記入ください。』、31ページの質問14「その他お気づきの点やお考え等ありましたらご記入ください」について、それぞれ掲載した資料です。キーワードとなる言葉や強くお考えが表れている部分につきましては、太字とアンダーバーで記しております。資料の32ページをお開きください。前回の協議会で山田委員から、「生徒向けアンケートの『質問5 現在参加としている部活動は有意義だと思いますか』はとてもよい質問である。有意義と答えた結果をクロス集計することで、部活動を有意義と捉える層の理由を探れると興味深い結果が得られるのではないかとご意見いただきましたので、そのクロス集計結果を掲載いたしました。

会長：ありがとうございます。この後協議に入るわけですが、その前に今のご説明の中で、資料の見方等について質問等ある方はいらっしゃいますでしょうか。この辺が少しわかりにくかったとか、これを知りたいとか、よろしいでしょうか。では続いて次第の4番、『部活動のアンケート結果から見える本市の課題とニーズとは』に移ります。引き続き事務局からご説明をお願いいたします。

事務局：本市の部活動地域移行のゴールと、それを実現させるためのロードマップ作成根拠とするために、これから委員の皆様におかれましては、部活動アンケート結果から見える本市の課題とニーズについてご協議いただきたいと思います。アンケート結果を送付した際にお伝えしましたが、今回、協議の大きな柱立てとして、「アンケート結果をどう捉えるか」、そして、「アンケート結果を踏まえて、委員の皆様が所属されている団体がどのような事ならできる可能性があると考えられるか」、「他の団体に確認してみたいこと、期待することは何か」について、本日も協議いただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

会長：ありがとうございます。それでは今のお話に3段階ありましたが、まずは皆様方がアンケート結果を見られて、その辺の印象からいろいろご意見いただきたいと思います。

思っております。せっかくですので順番にいろんな方にお話しいただきたいので、まずは林委員いかがでしょうか？

委員：内容が膨大で全体がちょっとわかりにくかったのですが、校長先生のアンケートの中で、「部活動がなくなると教員は勤務時間が少なくなならない」という意見もありましたけど、本当にそうなのでしょうか。それから、「中学校の部活全体を見直すときではないか」というような考え方もありましたけど、じゃあこれまでやってきた課外活動って何だろうかと、そんなことがちょっと頭にあります。子どもたちはどこへ行くのかなと。そこら辺りが少し心配になったというが、読ませていただいたところの第一印象です。中を細かく読み込んだところでは、人それぞれ、これはどういう考え方でこんな意見が出たのだろうというのはありますけど、全体の中ではそんな感じですよ。

会長：ありがとうございます。今のお話の一つ目が、「部活動は学校ではやっていけない」という、それが本当にどうなのかという、そういうご質問等があったかと思いますが、実際この辺りいかがでしょうか。

委員：私は部活はやりたくてやっている方ではありますが、音楽科の教員でもあるので、授業もそしてクラスも、学年の行事も、そして部活動もあります。私の場合、吹奏楽連盟の仕事もしているので、吹奏楽連盟主催の催し物の運営もしていて、それら全てをまんべんなくやるのは難しいです。特に秋はやることがすごく重なります。私はアンサンブルコンテストの実行委員長をやっています、それが11月にあるのですが、その説明会が10月にあつたりします。その説明会は18時からあるのですが、その日は吹奏楽部で部活を朝の6時半からやって、日中は発表会をして、夜18時から19時半ぐらいまで説明会をやってという一日を過ごしたりしています。また10月は市内音楽会や自校の合唱祭もあります。さらに、今3年生の担任しているのですが、3年生の進路指導もしており、1人1人の進路先のことですとか、10月はすごく任務が多かったです。年がら年中ずっと続くわけではないですが、10月はかなり激務の月でした。時期によるかもしれませんが、全てをまんべんなく余裕をもってできるかと言われると、なかなかそうではないのかなと思っています。

会長：実際なかなか学校現場がどうなっているのかというのは、やっぱり現職の先生じゃ見えないところも多々あるわけですけど、委員、今の言葉から意図が伝わったのかどうか、いかがでしょうか。

委員：「部活っていうものは学校になくていいのか」というのを聞きたいですね。今みたいに先生方もいろんな仕事をやっていて、時間が足りない、多忙だというのはよくわかります。そうだとすれば、部活をなくして先生の時間を確保するのか。そうではなくて部活を中学校に残しながら、他の考え方で先生も時間数を減らし

ていくのか。極端なこと言うと人を増やすっていうことです。そういう事を思い切ってやらないと今の考え方は見合っていない。ただ、さっきのお話だと顧問の先生が他所の学校行って、指導してはいけないというような考え方になると、そういうことができない。ですが、先生方の働き方改革と、部活動をどこで受け持って、どういう形でやったら子どもたちに一番被害がなく、今まで通りの部活動ができるかということを考えていかないと、駄目だろうなと思っています。校長先生の意見を見ると、1人ですけど学校の部活はやらないという意見もありましたので、どういう思いでそれが出てきたのかなというのは知りたいです。

会 長：ありがとうございます。かなり根本のところの議論かと思います。学校の先生が忙しいのはもう事実というところですが、部活動をなくして何かやるのか、あるいは部活動を活かしながら別のところでやるのかという、そういった対局の二つの案を出していただきました。これについていかがでしょうか。委員、よろしくお願いいたします。

委 員：先ほど委員の一つ目の質問で、部活がなくなると時間にゆとりが出るのかというのがあったと思いますが、そこは絶対にゆとりが出るとは思っています。これまで午後3時半ぐらいまでクラスを運営し、その後1時間半から2時間ぐらい午後の練習をします。そこの部活動がなくなれば単純に時間が増える、その時間を例えば教科の教材研究に充てるもそうだし、一人ひとりの生徒と話す機会も作れるという、時間の意味では作れると思います。切り離すということについて、私は中学校体育連盟という立場なので、部活動を完全に推奨しているような立場ではありますが、もうこれまで通りではいけないのだろうなという話をいろんなところで聞くと思っています。これまでのものを、何をして継続するかというよりは、これまでのものからまずダウンサイジングとか、そもそも考えを我々が変えなきゃいけないのかなと思っています。今回アンケートを取っていただいたときに、趣旨が伝わっていないというのがまず大きく思いました。生徒にはなかなか伝わらないと思いますが、保護者の方にも「地域移行って何ですか」という質問の方はいましたけど、広く捉えすぎていたり、そもそもそういうものを考えてなかったりというところを思うと、目の前で中学生が今取り組んでいる部活動を地域移行というよりは、今の小学生の子が数年後、中学生になったときに選べるとか、持続可能なものに変えていかなきゃいけないと思うと、小学校へのアプローチも必要なのかなと思いましたので話をさせていただきました。

会 長：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。今のお話ですと、これまで通りにはいかない、何か考えを改めなければいけないのではないかというご意見かと思いますが、委員いかがでしょうか。

委員：まずそれぞれのお立場でのアンケート結果を拝見させていただいて、一番の当事者である生徒は部活動に対してかなり肯定的に捉えていると感じました。逆に、校長先生、先生方からは否定的な考えの方がいらっしゃることは、ちょっと意外な感じがしました。その中で、そもそも部活動の地域移行のお話をしているわけで、部活動そのものをやめた方がいいとか、そういう話を見てびっくりしました。やはり生徒は部活動というものに対してかなり肯定的に捉えていまして、いろんなことが学べる、社会的なことが学べるというようなことを答えていらっしゃるということで、やはり一番考えなきゃいけないのは生徒のことだと思います。私は学校の部活動というのももちろん学校教育の一つと思っています。授業で勉強するという以外に、部活動というのは今後社会に出ていくための社会的な勉強を経験できると思いますので、部活動というのはずっと継続していった方がいいかなと思います。この協議会では、地域に部活動を移行するというところについてのいろんな手段、外部指導者であるとか、民間のとか、そういった団体に預けるというそういうことも含めて、話していかなければいけないと思いますが、体育部門と芸術部門、吹奏楽など、状況が違いますので、その辺は分けて話していかなければいけないなと思っています。実は池上委員が中学生ぐらいのときに吹奏楽の団体と一緒に活動していて、今教員になられて非常に立派になられたなと思っています。学校で部活動をやっていて、外の団体でも指導をやってきていて、今一番池上委員が両方のことを知っていると思います。部活動をいろんなテーマで、先生の働き方改革で負担を減らすとかあると思いますが、それを一つ一つ整理してやっていかないと話はなかなか進まないと思っています。例えば、企業に勤めていますと朝9時に仕事が始まって定時が6時だと思いますが、学校の場合だと大体授業は3時とか4時ぐらいで終わりますよね。その8時間なら8時間の中、その残りの2時間を部活動に充てているという先生方が多いと思いますが、どういうふうに捉えたらいいのかなと思っています。もちろん翌日の授業の準備とかもあるのだらうと思いますが。さっきのお話から、先生たちは負担が多いという話もありましたし、例えば吹奏楽とかであれば外部の指導者を呼ぶとか、部活動を継続していく方向で考えていかなければいけないと私は思っています。アンケートを見た中で生徒が、「礼儀を学べる」と書いてあって、それがぱっと目に入ってきたのですが、礼儀って部活の中で教えるのか自然にやるのか、どういうふうに教えるのか、それが非常に気になって私の目の中にパッと入ってきました。礼儀を学べるとか、それから友達同士の関係が成り立つとか、いろいろ書いてありましたが、生徒を一番のことと考えて、これからこの話を進めていただければというふうに思います。

会長：やはり一番の中心は生徒であるということで、先ほど林委員の方からも子どもにとってというところが一番のベースにあったかと思っています。そう考えると今のご

意見からは生徒にとって部活動はやはりなくてはならないものである、一方で学校では先生方が多忙化しているという状況から、子どもたちの部活動をどう我々が担っていくのか、これがやはりテーマになってくるところだと確認しました。他にいかがでしょうか。

委員：私も初めてですが、やはり子ども主体でやるのは当然だと思います。なおかつ生徒の自主性を持たせるような仕組み作りですとか、方向性を持ってやっていけたらより、一層いい部活動ができるのではないかなと思いました。

会長：他にいかがでしょうか。委員いかがでしょうか。

委員：一応アンケートに全部に目を通しましたけれども、よく内容が掴めていません。ただ校長先生、教員は地域移行に傾いているのかなと思ったのと、保護者としては地域移行になった場合も経費のことがとても心配なのかなと思いました。教員の方々で一番気になったのが、今は自分の得意なものを部活で指導されていますけれども、じゃあ他のものもできますかといったらできないというところです。バスケをやりたいけれども顧問の先生がいなくて、バレーボールに移って、2年生になったときにバスケの先生が来たので、そのとき散った人たちも全員バスケに戻ったと言う話を聞いて、子どもたちがそういうふうに左右されちゃうのもかわいそうかなと思いました。私自身地域移行は賛成です。それに対して国はどれぐらいの補助をしてくださるのか、子どもたちや家庭に対してしてくれるのかというのが本当に心配です。

会長：貴重なご意見をいただきました。それぞれの立場で、校長先生の立場からは地域移行と、保護者の方はやはりお金の問題、各先生方にとっては得意ならできるけど当然苦手なものはできない、こういったところが出てきたかと思います。校長先生いかがでしょうか。

委員：結果を見ると、学校から部活動をなくしたいということではなくて、やはり教員の生活を守りたいというような趣旨だと思います。根本的なことを申し上げれば、部活動というものが、教員が担うべきものなのかどうかということも分岐点に来ていると思います。今まで当たり前前に教員が持つものだった、それが業務として行われているというふうに錯覚していたのですが、実は別に業務ではなく、お願いされて、「いいですよ」とボランティア的にやっているのだと。部活動をやりますと特殊業務手当というのがいくら出ますけれども、やっぱり根本的なところで言いますと、教員が担うべきなのか。先ほど生徒ファーストということをおっしゃられていたのですが、やはり少子化に伴って学校に部活が設置されなくなっている種目もあります。生徒の保護者もそうなのですが、アンケートを見ますと、特段そこは大きな問題にしていけないのです。あったところに入ればいいのかという、そういったニーズの方が高いと読み取れるのですけれど

も、ある一方で、もうそれが立ち行かなくなっている。例えば軟式野球部も合同部活動、それから私が教員をやっていた頃にはサッカー部は市内19校公立校全部にあって、私立も含めて23校あったのが、公立中学では一校確実になくなっていますし、合同部活動もあるような状況です。校長会としましては、地域に移行することによって、それこそいろんな地域から集まってきて、活発なスポーツ活動ができるとか、文化的活動ができるという状況を作り出すということで、活動場所として中学校を有効活用してもらえたらと思います。しかし、やはりここは必ずしも教員が絶対に指導に携わらなければいけないというところを外していく、できれば全面的に外した方が、子どもたちが良い指導を受けられるのではないかと思います。専門的な技術とかそういうことではなくて、安定した指導が受けられるという理由からです。顧問の異動によって今まで盛んだった部活動が急に衰退してしまうことなく、安定的に指導が行えます。今まで教員がほぼ無償で担ってきたものが、地域一般に返されることによって、そこには当然支払われるべき対価が発生する。それがあべき課外活動の姿ではないかなと思います。課外と言いながら、中学校においては教育課程のほぼ一部だと感じます。私の肌感覚でいいますと、部活動顧問時代の業務は4割ぐらいを占めていたと思いますが、それだけパワーを注いでいました。先ほど企業の話があったと思いますが、私が顧問をしていたときには、朝大体7時に学校行って、学校を出るのは平均夜9時でした。そこまでノンストップで、全力で仕事をしていました。先輩方もそうしていましたし、それが当たり前だと思っていました。でも社会が変わってきていて、ブラックだとか、そういったことが本来業務ではないということがまことしやかに世間に露呈されたら、そういったものを見聞きする中で教員の心は非常に揺れています。加えて、令和8年度に休日は地域移行を目指すというのが持ち上げられて、それを教員は目の当たりにしてしまいました。本来だったら自分の子どもの活動とかに携わりたかったのがなかなかできなくて、ようやく部活動指導から解放されると思ってしまった教員が今すごく動揺している状態だと思います。そんな姿を目の当たりにしている校長の意見としては、早く地域に移行したいという意見が傾くのですが、その意見を委員の皆様がご覧になったときに、「校長、早く部活やめたらどうか」とも思われたと思います。本当にここまですべて子どもたちに有益な活動を提供してきたという自負もありますし、今後も子どもたちが活動を継続できるということを校長は願っておりますので、ぜひこの会の中でいい協議ができて、藤沢市の子どもたちの今後の文化的活動だとか、スポーツ活動が発展的に、継続的に行われるといいかなと思っています。

会長：ありがとうございます。先生たちは決して部活動をなくしたいわけではない。しかし、教員の生活を守りたいといったところが主眼にあるというようなお話もあったかと思っています。もう一つ大きいところとして、これまで先生がやるもの

と当たり前で思い込んでいたけれど、実はそういうものでもない、改めて問い直しながら考えていく必要があるのではないかとといったようなご意見もありました。続いて委員いかがでしょうか。

委員：それぞれの立場でどういうものを期待しているかということで、技能の習得だとか礼儀だとか仲間作りだとかというのがあって、それが様々な立場によって若干違う傾向が出ているのかなと思います。それは当然のことだと思うのですが、その辺りをもう少し深く分析をしていくと、地域指導者や外部指導者にどういう方が適任なのかということが、おのずと見えてくるのかなと思います。全然期待しているものと違うものを提供するアンマッチとかそういうものもなくなりますし、過度な期待とか、そういったものを招く恐れが少なくなるというところもあって、この辺りをもう少し深掘りをしていくのがいいのかなと思いました。それから校長先生のアンケートの中で、比較的今の段階的な移行よりも一足飛びに最終形態を目指した方が、今後うまくいくのではないかと意見があって、それはそうだなという気もします。ただ今のアンケート結果の中身を見ると、やはり教員の教える部分と地域の人から教える部分のその難しさだとか、そういったところが書かれていて、中途半端な中ではその教員の働き方改革とか、そういったものに資するような取り組みではないというようなご意見だと思われまます。私もそのように感じます。ただ一足飛びにできるかと言ったら、現実的に受け入れる地域の人、人材の問題だとか様々な問題がなかなか成熟していないところでは、一足飛びに行かないと思います。現在リアルタイムでその部活動を担っている教員の方とか校長先生たちには恐縮なのですが、通過儀礼ではないかと思うんです。要するに最終形態に行く中で、段階的な切り替えも、確かにまどろっこしいところもあると思いますが、受け皿というか担い手の方も成熟していかないですし、「いつやめます」と言ったときに、担い手がいなかったら一番被害を受けるのは生徒になるので、現状忙しくて大変だという学校の現場の状況もあるかと思いますが、やっぱり数年、軌道に乗るまで、お互いに地域の人間とか、それから学校の先生も少しもうひと踏ん張りしていただかないと、なかなかゴールには辿りつかないのかなというのを、この校長先生のアンケートから感じたところです。

会長：今委員からお話いただいたことは、協議の2番に入ってきたのかなという感じを受けました。今後、どういうことをやっていくのか、可能性の方ですね。次のステップの非常に大きなテーマを二つお伝えいただいたと思います。一つ目が、子どもたちが何を期待しているのかと、外部指導者の適任をどう見極めていくのかという、このマッチングの問題を考えていく上で、今回の子どもたちが期待していることが非常に重要になってきて、これを次のステップとして考えていく必要があるのではないかとといったところです。もう一つは確かに校長先生のご指摘にあった段階を踏むと、生徒とか教員にとってもやりにくいのではないかとこの現

実的なお話がある一方で、もう1個のさらなる現実的な話題として、担い手が一気にそれをできるのかといったところの難しさを考えると、やはり段階的にやっていく必要があるのではないかと。こういう二つのご意見をいただきました。それでは続きまして、この2番の方に入っていきたいと思います。アンケート結果を踏まえて、各団体がどのようなことならできる可能性があるかといったところも踏まえながら、今のこの二つの論点とどういうことをやっていくのかといったところを少し議論していきたいと思います。この点いかがでしょうか。

委員：そもそも部活動の地域移行をスポーツ庁の方がどこまで考えているのかなというのが、はっきり見えないというか、わからない部分です。例えば、学校とはもう全く別組織としてスポーツをやっていると思いますけども、そういった形に持っていきたいのかなと。そのために総合型地域スポーツクラブとか、そういうのを作ってきたのかなと思うのですが、今は「部活を残しながら」というところを意識しているのかしてないのか、その辺も見えてこないところです。そもそも部活動の意義というものを考えたときに、いきなり地域に持っていくのは難しいのかなと思います。ですから少しずつということで、まずは土日の練習からやるというかたちに考え着的のかなとは思っているのですが、いずれは学校とスポーツというのは別に持っていくのかなと何となく思いますが、その辺のところはちょっとわかりません。私もスポーツ少年団をやっているのですが、以前教員をやっていたころは、スポ少の指導というのは当然5時以降にやっていました。週に2回程度、1回から3回程度ですけども、勤務が終わってからという形で、土日はボランティアで練習や試合をやっていました。だから今の部活動の回数はアンケートの中にもありましたけれども、回数が多いとか運動量が多いとか、そういう意見も子どもたちの方からも出ていますし、もうちょっと減らしてもいいのかなと思いつつ、地域になった場合には、おそらく毎日難しいのではないのかなというふうに思います。どこから手を付けて良いか本当にわからないのですが、とりあえず土日の移行からやっていくという形でやらざるを得ないのかなと思います。スポーツと学校を切り離す形で、もしそこに教員が関われる余地が残るのであれば、それはそれで良いことだろうし、日本のスポーツがあまり衰退していかないように、なるべくいい形で残していきたいと思います。アンケート結果の「部活動を通してどのようなことを学んだり身に付けたりしているか」をクロス集計した結果の話がありましたが、子どもたちの回答では技能の向上がやっぱり一番多い。次いで、活動楽しむというのが多いと、これは当然だろうなと思います。保護者の回答を見ると、活動を楽しむ、仲間作り、が多いのですが、自主性とか、自信をつけてほしいとかが強く出てきているのかなと感じました。子どもたちの考え方とそこでちょっとズレがあるのかなというふうに捉えましたが、いかがだったでしょうか。となると、子どもたちがその地域で活動するときに、専

門的な技術を身に着ける場と、楽しむ場と、両方設けてあげた方がいいのではないかなというふうに思いました。

会 長：ありがとうございます。一つは、国が将来展望としてどう抱いているのかというところが、なかなか見えにくいといったところですね。もう一つは、やはり土日から順を追ってやっていくしかないのではないかとといったところで、できる範囲からやっていくということが一つ重要なことを示唆されているかなと思います。言い方を変えると、できることからという「できること」って何だろうというのが、次に出てくる大きな課題かと思います。また、藤沢市として今後地域移行をしていく上で、専門的にやりたいというところと、楽しむとか礼儀とかこういったところを重視するような、いくつかの多様な枠を設けていく必要があるのではないかというお話があったかと思います。先ほども土日からというのは仕方ないのではないかという話もありましたが、このあたり学校側としていかがでしょうか。

委 員：学校にはいるのですけれど、私はこの会議におそらく市民団体の立場として入っているんで、本当に両方の状況がわかります。団体の方たちにはすみませんと思いますし、学校側からすると、このアンケートの中身が手に取るように見えるというのが本音です。そう考えると、今いろんな意見にフムフムと思いながら、いろんな問題がもちろんあるけれども、踏み出した方がいいなというのが私の考えです。というのは、中学校も大規模校と小規模校で、全然事情が違います。大規模校は、「うちは地域移行をしなくても大丈夫です」というぐらいの勢いで、すごく頑張ってるやっています。でも小さいところは、1年生の部員が入らなかったとか、地域のサッカークラブに入っちゃったというように、誰も入らなかったところも出てきているのです。サッカー部で顧問をやりたい先生は「やりたいんだよ」と言っています。地域に移行して、どういう準備ができるかわからないけれども、こういうことだったらやっていいよという状況があるならやりたいと言っている方もいらっしゃいます。私は小学生の市民バンドをやっています。何で始めたのかというと、保護者の方から要望がありました。小学校のいわゆるクラブ活動というの、数がすごく少なくなってしまって、いわゆる器楽クラブというのがほぼなくなってしまい、小学校のうちに吹奏楽の楽器を体験するという状況がないのです。それで、小学校の4・5・6年生だったらできるのではないかとこのところからのスタートで始めているのです。もう見事に3年生ぐらいからすごく上手になります。だから、やってよかったなという部分と、部活動じゃなくて名前のないところから、何もないところからスタートするというのは、ノウハウとしては生かせるのではないかという気はします。アイデアとしては「こんなふうをしたい」とか「ああいうふうをしたい」とか、「こういうことに気をつけたい」というときに、自分はもちろん教員なので教員目線もあるし、保

護者の方とやり取りをしながら、本当にやっぱり自主的な活動をしていると思います。委員の方からもあったように、本当に生徒の自主性っていうのが生きた形で地域に根付いていったら、地域の力になっていくと思います。実際その部活動って学校で担われていた、学校の中でできていたので、学校の先生は一生懸命やっていたわけですね。今管理職の先生方から厳しいご意見がたくさんありましたが、ほとんどの人は部活を夢中になってやっていた人たちなので、やっているときは一生懸命やっていたのです。それで、おそらく今の管理職の立場だったら、ここをちゃんと話していかなければいけないという気持ちもおありになるのではないかと思うのですが、私としては、学校と地域の方たちのお力をお借りして、中学生と一緒に育てていただけないですかという感じです。そうすると先生たちの負担も減る、先生たちもやる人はいるのです。だからやりたい人は、頑張ってもやればいい。それから子どもたちもすごく多い人数でやりたいと思っている子もいれば、少人数でやりたいという子もいるという感じがします。それから、中学生同士でやりたいって書いてある子もいれば、大人に教えてもらって大人の中に入って福祉的な活動をしたいと言っている子もいるので、やっぱりニーズは地域にお願いした方が受け止めていただけるのではないかなと。子どものニーズを拾うっていうことですよね。そう考えると力を貸していただきたいなという気持ちです。

会長：ありがとうございます。地域側と学校側の立場で、両方の視点からお話しいただきました。踏み出した方がいいというご意見を強くいただいたところです。ちょっと印象的だったのが、部活動は生徒の自主的な活動であると。そういう意味では継続すべきという話と、面白いなと思ったのが、その生徒の自主的な活動が地域に行くと、地域にとってもプラスが出てくるのではないかというご指摘をいただきました。ただ、先ほど委員からもご指摘いただいたように、できる範囲からやっていくというところですね。できる範囲でまず何ができることなのかというところが残ってくるところで、この後またディスカッションしていきたいのですが、一通り一言いただきましたが、さらに一言付け加えなどありますでしょうか。

副会長：昨年までの議論の中でどうだったかはわかりませんが、今この議論ができたところは、これまで部活動を学校が担ってやってきた、教育のありようとかあり方とか意義は大きいということで、これを取り潰すという議論ではないのだということを確認した方がいいと思いました。それからもう一つは、保護者のアンケートも含めて、皆さんの今日の今ここまでの1時間ちょっとくらいの範囲でも、教員はやっぱり多忙だと、確実に多忙だという認識を持った方がいいということです。それをどうするかは置いておいても、教員の生活を守りたいという表現もありましたが、私個人は大学法学部で8時間労働制を習ってきて、学校現場に1

1978年に入りましたが「何これ」と思いました。「8時間じゃないじゃん」って。「テスト1週間前しか休めないじゃない」って。部活動は校長命令とか業務命令の範囲ではないと知り、「なんだこりゃ」と思いました。その疑問が未だに解消されずここにいます。でも一生懸命部活をやったし、部活動によって子どもを立派に育てたいという教員の生きがいでもあるなと思ってきました。家庭は本当に大変でした。妻は教員ではなかったので家庭を任せっきりになることや、部活動の場に自分の子どもを連れてきてまで育てなければいけなかったのです。高倉中の前の田んぼに連れてきて、一緒に虫捕りをしながらも、生徒はコートでテニスやっているみたいなことをしながら、今考えると本当に何だったのというぐらいです。1978年時点で変だと思っていましたよ。8時間労働制が「無理だ」って。もう一つ言うと、田中角栄さんの時代かな、人材確保法案というのが通ったらしくて、簡単に言うと、時間外労働に対する手当は4%ぐらい多めに乗っているから、一切しないという世界だって、「何これ」って思いました。それで皆に納得させているわけ？って。見ていると小学校の先生は大体5時頃に隣の富士見台小とか長後小とか、みんな帰っていきけるのです。我々は下校時間6時半までやって、その後テストを作ったりするので9時以降が当たり前でした。朝6時半から朝練やったとして、夜9時とか9時半10時まで学校にいるのが当たり前でした。それからその間学校に電話がかかってくるのです。今は、夕方5時以降は録音テープになりましたけど、業務外なので明日となっただけOKですけども、当時は地域から電話がかかってくるので「子どもがコンビニで大変なことをしているから」っていうので出かけていきましたよ。生徒指導として全部やりましたよ。そこまで多忙でした。それが現実なのです。これは本当に多忙だということを経験した方がいいと思います。それをどうするかはまた置いておくのですけれども。三つ目です。土日祝日の部活動を今後とも学校という場でぜひやっていきたいと学校長が思っているのかとも思っていたのですが、今回見ると5人はやらないで地域移行でいいのではないかと。7人ぐらいが難しいどちらとも難しいといろいろな議論をして自分の頭の中で考えている。7人は良くないと思うと書いてありますが、順番に見るとそうではなくて、移行するのが良くないのではなくて、2段階が良くないと言っているようなものなのです。何だかんだ言っても移行の方向へ踏み切った方がいいと学校は考えているというのは、僕は学校を経て校長をやめて今の立場があるけれど、今はそう思っているのだというのを再認識しました。この流れまでを踏まえた上で、どうしたものかなというのを、それこそ受け皿をやってらっしゃる団体の方もいらっしゃるかもしれませんが、そうじゃない方々にはどんなことをこの協議会として課題があるのはどの辺かなというのを含めて協議していくことが大事なのかなと、今ここで思いました。

会 長：我々の協議会としての確認について、いくつかご指摘いただいたところです。一つ目は繰り返し最初から議論になっていたところで、子どもたちの部活は決して止めるものではない、子どもたちの自主性を守っていかなければいけない。この辺は全員共通一致で議論されていたのかなと思います。教員の生活を守るべきだと。これまでの時代がやはり変わってきたといったところでの、地域に移行すべきであると、この辺もかなり共通理解が取れているのかなといったところです。土日2段階でいくのか、それとも1段階でいくのかといった議論は、何人かの委員の方からもやっぱり2段階にせざるを得ないのではないかというご意見をいただきながらも、校長先生のアンケート結果では、1段階でいった方がスムーズにいくのだと言ったような意見も聞かれているところだと思います。このあたりの共通理解に対してご意見、何かありますでしょうか。

委 員：地域という言葉がよく使われるのですが、その地域とは何だということが不明確です。ですから、その地域というのは、どこを皆さんが見ているのかということも、皆さんと共通認識を持っておいた方がいいのではないかと思います。

会 長：ありがとうございます。非常に重要なところですよ。学校は明確ですけど、地域とは一体どこを指すのかといったところかだと思います。先ほどからの議論にあるような生徒の想いを一方で聞きながら、地域の指導員のマッチングという話もありますが、地域の一体どこに対して依頼をするのかとそういうお話でよろしいでしょうか。

委 員：活動の場所をもし学校とすれば、その活動の場所は学校しか今のところ無いのだろうなど。そこを地域とするならば、学校から切り離れた中でも、活動の場所を、学校を通した地域活動としていくと、その地域活動というのは地域が受けるから地域活動ではなくて、学校から離すから地域活動で、趣旨はこれまでやってきた課外活動の延長としてできればいいなというふうな考え方です。それから、学校のクラブ活動は大切だという意見を持った校長先生もいらっしゃいました。だから、やはり先生方の忙しさを何とかなくして、先生の生活を守りたいというその学校現場での気持ちがそのままいただいたアンケートなのだと思います。ただそこに、その次に続く子どもさんたちのことは何も書かれていないので、ちょっと不安に思ったというところですね。だから私は、地域に移管するということは、必ず学校外の地域で活動するのではなくて、活動をする場所は学校だと。ただ運営の仕方を、先生方が手を離れた形の中で、どうしたら運営できるかということを考えていかないとうまくいかないのだろうと。それから、段階的にやるけれども、最終的にこんな形になったらいいなというものがある程度作りながら、じゃあどこまでやっていこうかというのを段階的にやっていくというふうにしないと、なかなか実現出来ないのではないかと思います。

会 長：地域とはどこを指すのだという話で、まずは活動場所が学校でいいのかどうかという話です。もう1点は、学校でやりながらそれを運営の仕方として地域の人たちにやっていただくという話と、先ほど一步目を踏み出すという話もありましたが、最終的な大きな形にこの辺のビジョンをしっかり持っていなければいけないのではないかという、この二つの貴重なご意見だったと思います。活動の場所は学校で、運営する側としては地域の人たちがやるというこの見解で何かご意見などありますか。

委 員：これはまだ私的な案ではあるのですが、この案については市教委にもご紹介をしているところですが、私が勤務しています御所見中学校は、本当に西の果てですごく交通アクセスも悪いところです。どうしてもそこ子どもたちが人数減ってしまうと、やはり他の地域から応援してもらおうというか、作ってもらわなきゃいけないということがありますし、小規模校なので部員不足に悩んでいるところもありますので、一例としてこんなことを私の方では考えています。本校グラウンドにはナイターがあるので、一般開放を夜7時から使ってもらっています。それを7時半に遅らせてもらえれば、平日の週2日間はクラブ活動の時間として、5時半から7時半は優先的に中学生の時間として使うことができます。ただ、体育館については、平日2日と限定してしますと、日数が足りなくなってしまうので各部活動で賄えなくなるので、近隣の御所見小と中里小に貸してもらえれば、5時半から7時半の2日間は平日クラブとして活動ができます。当然5時半からですので、教員が指導に携わるとしても勤務を終えてからそこで指導に携わることになります。そこで、部員・メンバーから指導費みたいなかたちで月謝を徴収しまして、すごく単価としては高いのですが、2時間きっちり指導して5,000円ぐらいもらえるような、休日1日練習試合で大会に行ったら1万円ぐらいもらえるような、例えば20人の生徒を指導すれば、1人の顧問でそういうことをやったとしたら、多分それが可能ではないかなという試算を私はしています。文化部については、やはりこれも夕方5時半から7時半の間学校を開放しまして、その団体は専用の入口でアラームを解除したり、機械警備を解除できるような入口から入ったりしてクラブ活動をする。当然段階的ということがありますので、部活動も並行して行いまして、部活動も平日2日と土日はどちらか1日という、今までより短く2日に規定して、その代わり土日どちらか1日出来ると。その際にクラブとしてやってない子は、お金は発生しないというような形で考えております。そんなことを御所見中学校でできないかなと、徐々に表に出しながら賛同していただけたら、そんなふうにしたいなと考えています。もう一つ、市内全体でどこが地域かということですが、13の地域に藤沢市は分かれていますと思いますが、それぞれ市民センター等がありまして、そこに地域と学校と保護者という三者連携団体というのがありますよね。御所見地区だと「御所

見ふれあい教育ネットワーク」という団体なのですが、そういった13地区の市民センターのようなところが事務局というか、回すような形を担うようなことも考えられるのかなど。そうなりますと、その分地域クラブというものが市長部局などの方に移管して行って、市長部局の方からスポーツ推進課等が中心になるのかな、なんていうふうにも思っているところがあります。2020東京オリンピックのときに、藤沢市のオリパラ準備室というのが市役所の中にできたかと思いますが、やはりここから先に本当に移行するのであれば、何か部活動の地域移行の準備室のようなものが市の中に1部署として専門的に扱うものができるぐらいになってくれば、速度が増して推進されるのではないかなというのは、これは全く私の私見なのですが、そんなことは考えております。

会 長：ありがとうございます。かなり具体的な案をお示しいただいたので、いろんな学校での一つのたたき台になるのではないかなと思いました。特に土日はどちらか1日とか、平日の2日にしてこの土日に指導者を呼んでいただくということですね。またそういった意味では、スポーツ推進課等に学校の部活動の部署を作ってもらえただけだと、そういったことがスムーズに動くのではないかなというようなご提案と認めたところですよ。今のお話を受けてご質問等ありますでしょうか。

委 員：今のことにどう答えるかというのは難しいところがあるのですが、先ほど話にもあった「地域ってどこなの」というところでは、一義的には委員がおっしゃった通りだとは思いますが、やはり活動場所の確保というのが、藤沢市のスポーツの文化もそうですけども、人口の割合に比べて施設がちょっと手薄な感じがありますので、やはり学校の施設を有効活用するというのが大前提になってきます。生徒にしても普段通っている学校での活動ということで安心感、保護者の安心感とか、そういったものも当然あるということなので、そこはそういうことなのかなと私も思います。ただ昨今、今回のパリオリンピックなんかもそうですけれども、いわゆる横乗りスポーツやアーバンスポーツ等が、オリンピック種目になるという中で、スケートボードですとか、藤沢市であればスポーツクライミングなども盛んになってきているという状況を受けると、子どもたちから将来的にそのニーズがいっぱい出てくるということも予想されます。そういうものをやはりきちんとした施設のあるところに出向くとか、専門性のある団体に頼む、それから担い手として地域とは何なのかという視点で民間のスポーツクラブや、スポーツ協会、各種目協会、レクリエーション協会加盟団体、文化団体連合加盟団体、大学教育機関なども視野に入ってくるのかなと思います。それと、私どもみらい創造財団も教育委員会から受託をして、モデル実証のお手伝いを昨年からは始めている状況にあります。その中での課題として、平日の会計年度の部活動指導員と平日の外部指導者と、それから土日にやる地域指導者という、この三つの制度が、報酬体系ですとか勤務領域ですとか責任領域ですとか全く違うシステムが

並行して動いているというところで、ここら辺はやはり早急に整備をする必要があるのかなと思います。もう一つ、スポーツ少年団を例に出すと、やはり1人で指導するというのではなくて、集団で指導するという形に徐々になっています。指導者の仲間が増えたり、どうしても都合がつかないときに他の人が指導に当たったり、人が足りないところは誰かがフォローするという形で集団指導体制というのができてきて、それが将来クラブ化とかそういったものに繋がるのではないかなと思っています。現在、財団として休日の部活動の地域クラブモデル実証をお手伝いしていますが、指導体制と報酬の制度についても今後見直していくといいのかなと思いました。

会 長：ありがとうございます。だんだん論点が明確になってきているのかなと思います。特に地域とはどこを指すのかという議論から始まり、やはり外部指導者をどうやって整備していくのか、外部指導者自体を整備する何らかの組織がないとなかなかそこはうまくいかないのではないかなというお話があったかなと思います。またそこも、1人じゃなく集団でやっていけるといいのではないかなという話がありました。今のお話について何か付け足し等がありますでしょうか。

委 員：神原委員の言われることはよくわかっているのですが、実際問題としてスポ少の指導者たちを見ると、働いている人たちが自分の空き時間を利用してやっているわけです。ですから、どうやって関わるができるかというのは私も特に調査したわけではないのでわからないのですが、中には部活動指導をやってみたいという方もおられるので、一部の人たちの中では、部活に関わる方が出てきてくださると思います。ただそれをどうするかたちで掘り起こしていくかというのが、例えばどこかの市のスポーツ課の方から声をかけてもらうとか、あるいは財団の方からとか、どこかに動いていただかないとなかなか我々も動きにくい部分もあると思います。なるべく協力していきたいなとは思っています。

会 長：ありがとうございます。実際働いている人たちが外部指導者でもあるといったところでの現実が、またそこにはあるという話だと思います。この辺をもう少し焦点化してご意見をいただきたいのですが、外部指導者をどのように依頼するのかといったような話と、それを束ねる組織、そういったものをどう考えていくのかといったところだと思いますがいかがでしょうか。

委 員：これまで出てきているような具体的な内容ではないのですが、今私自身が吹奏楽部の指導をしていて、先行きはぼんやりしているのですが、とりあえずこんなことやってみようかなという実践例がございます。私の教え子が音楽大学生だったりとか教員志望の大学生であることが多くて、結構連絡を取り合ったりすると、ボランティアで来てくれます。藤沢市内という地域に加えて、県内もそれも地域なのかなと思っています。お願いすると喜んで来てくれて教えてくれるので、お

互いにとってメリットがいっぱいです。大学というのも地域に入ってくるのかなと思っていて、大学の教育学部のそういう学科、実際にその地域の学校に出向いて体験をする学科みたいのができて、大学を経由してそういう学生さんがボランティアで教えに来てくれると、持続可能な部活動の地域の枠が広がるのかなと思っています。この先どうしようという具体的で明確なものではないのですが学生さんと直でやり取りをしてボランティアで来てもらってということを進めています。

会 長：ありがとうございます。先ほど市内の13地域という話もありましたが、もう少しこの13地域の小さい地域ではなくて、もっと広げて藤沢市あるいは県レベルで大学等も含めて、地域を考えていくことが重要なのではないかといったことだったと思います。ある意味そういった意味でこんなことをやってみようかなという、こういう一步目の想いは非常に重要なところですよ。何かやってみないとわからない、できないところをやっていくというような、これはかなり重要な部分だと思っているところですが、他に何かありますでしょうか。

委 員：今は地域という中で、我々外部団体に何ができるかなということをやっと今考えてみたのですが、具体的にごく最近ですけど、湘南台で「わくわく体験広場」というようなことをやらせていただきました。そしたらお子さんたちがかなり大勢来られました。お子さんが来られた理由は、やはり地域の宣伝があったからこそ来られたという方がほとんどでした。お子さんがすごく活発に体験されたという内容を聞きました。そういったことを踏まえて、ざっくばらんに気軽に来られるような部活動の雰囲気作りとか、そういったことが必要だと思いました。

会 長：私自身も非常に重要だなと感じているのが、地域の宣伝、言い方を変えると地域の人たちにとってプラスになっているということです。この辺は本当に考えるべきアイデア次第かなと思います。要は外部指導者の方も団体としてやってきて指導者を出すわけですけども、生徒さんの部活を見ることによって、実はその団体自体が、プラスになっていく方向って何だろうという、単純にお手伝いをするという立場だけで考えるのではなくて、考えようによっては、団体自体が盛り上がっていくというような発想がどんどん出てくると、まさにWinWinの関係が出来上がるような気もしました。どうアイデアを出していくのかといったところが、大きな話になるのかなといったことを吉野委員からのご意見ですごく感じたところです。他にいかがでしょうか。

委 員：私も三者連携から推薦されてここに出て来ているのですが、私は六会地区の「学園都市むつあい」という三者連携の会長をしています。そこからまた小学校・中学校のコミュニティスクールというのに参加しています。その連携の中で、地域の人材を活用していくという学校の要望とか、お助け隊みたいなのをやりま

す。日大とか多摩大とかもありますので、人材を発掘していくお願いしながら、子どもたちのためにということで連携していくのですけれども、部活を移行するときに地域の人材を活用していくということで、推奨していききたいなと思っています。

会 長：ありがとうございます。人材の発掘はかなり大変なことだと思いますが、発掘していく際のポイントとかはあるのでしょうか。

委 員：会の中にいろんな人がいらっしゃるので、「どうですか」という話の中で本当にうまく上がってきますね。

会 長：いろんな人がいれば、誰々はどうですかという意見が上がってくるものなのですね。これも今後地域の人材を発掘していく上で、どういう人たちが集まっていて、いい方いませんかといったことを、どのようにやっていくのかも非常に重要なところかなと思いました。

委 員：ちょっと今の話とずれるかもしれないのですが、先日空手の大会が藤沢市でございました。中学校とかに空手部はないのですよね。でも、空手をやっているお子さんが非常に多くて、市内には13か14の道場があるというお話を空手協会から聞きました。部活動をやりながら空手をやっている方もいるし、空手の方に専念している方もいるし、いろいろなお子さんがいるのですけれども、部活動にはないけど、これも一つの地域移行のかたちになるのかなというふうに僕は感じたところです。学校の先生ではなくて、まさに地域の指導者がそれぞれいるわけですから、そういった形もあるのかなという感じがしないでもないです。

会 長：ありがとうございます。先ほどから何回か出てきたかと思います。学校でやることを大前提に原則としながらも、施設でやっていくという話もありましたし、専門的なことをやりたいお子さんと、もっと楽しみたいとか、空手に専門的になりたいといったような、いろいろな層があるのではないかなといったときに、そういう形の受け皿も一つあると非常にいいかなと思います。だんだん時間も過ぎてきたところで、2番がちょっと盛り上がったところですが、3番についてももしあれば簡単にお伺いしたいと思います。他の団体に確認してみたいこと、期待すること、この辺りいかがでしょうか。

委 員：少し前の話とも繋がってくると思うのですが、「今のままでは」ということを冒頭に言わせていただきましたが、昨年東海大学の川邊先生がおっしゃっていたダウンサイジングにも繋がるのですが、我々教員が今踏ん張らなければいけないということは皆さんが言われているとおりで。今の部活動をダウンサイジングする、例えば平日を3日にするとか、土日どちらかにして1週間で4回の部活動にしていくというところだと思います。それこそ本市の外郭団体であるみらい創造

財団さんと高浜中学校サッカー部が、ゴールデンアカデミーという総合型地域クラブ活動の方とコラボレーションしている2年目のように、成功事例を増やしていくという、言葉では簡単なのですが、成功事例をどう築いていくのがいいのか。藤沢市だけではなく、他市ももちろんやっていたり、全国に目を向けると千葉県流山市が同じぐらいの規模で大きく動いていたりするところで、もう少し成功事例をもとにゴールを見つけていいのではないかなと、ゼロベースでスタートする必要はないのではないかなと思います。藤沢市が持っている資源・人・物を有効活用する方法をうまく見出せていくといいかなというふうに思っております。

会長：ありがとうございます。藤沢市の中にある資源や物、実際この中にもまだまだあると思いますし、我々の知らない中にもまだまだ潜んでいるのではないかと思いますけど、やはりこれを発掘していくというところが、今後の大きなところかなと思います。他に何かご意見ありますでしょうか。それでは、時間もだんだん終わりに近付いてきましたので、一つ今日の流れを全体で確認しながら、次回に向けて考えていきたいと思っております。まず、今日の協議会で共通理解されたことですが、やはり子どもにとって部活はなくてはならないものであって、自主的に頑張っていくことを、何らかのかたちで支援していきたいといったところが一つ目の大きなところで確認されたことだと思います。

また、学校側で考えてみると、やはり昔と今とはかなり違って、先生の多忙感、またそもそも論として、学校の教員にはそういったところが任務としてはないといったところも含めて、この辺をどう解消していくのかといったところが、やはり地域移行にあるべきものかといったようなお話があったかと思っております。地域移行をどうしていくのかといったところで、校長先生のご意見の中には、1段階で行った方がいいのではないかなといったようなお話がありましたけど、今日皆様方のお話を聞くとやはり現実的な問題としては、段階を追ってやらざるを得ないのではないかなといったようなご意見が主流になっていたと思っております。そういった中で、大きなところで地域とはどこを指すのかという林委員からのご意見もあり、その地域をどう捉えていくのかといったところが後半の大きな議論であり、校長先生からの具体的なご提案をいただいたところもあります。地域をどう考えていくのか、また各団体がどこまで何ができるのかといったところですね。谷口委員からも、やってもらうことはできると思うが、どこまでやれるかといったような、これもなかなか見えないところもあったと思っておりますが、多くの意見としては、一歩目を踏み出すことが重要であるといったところと、でもそうとはいえ、最終的なイメージだけはしっかり持って動かないと駄目だという、この両輪を頭に描きながら、それでもやはり一歩目を踏み出せない限り、何も見えてこないといったところで、地域の人材発掘、あるいは他方ではこの人材を束ねる

組織といったものをどうしていくのか、といったようなご意見だったかと思いません。

こんなことを含めて、今日は改めてもう一度皆様方に、各団体の方に持ち帰っていただいて、「こういうことだったらできる」といったものを、色々収集しながら、まだマッチングまではいかないと思うのですが、学校側でできること、また先ほど山田校長先生からもお話ありましたように、「こんな形でやってみてはどうか」というようなご意見をいただけるよう、各地域団体の皆様にそれぞれもう一度考えを持ち帰っていただいて、2月の第3回目に繋げていければいいなと思っていますところ。その他、何かお話の中で付け加え等あれば、ご意見を伺いたいと思います。

委員：システムの整備という部分で、やはり子どもにとっても保護者にとっても、費用のところというのは絶対落としてはいけないところだなと思っていて、部活だからお金がかからないからやっているのに、習い事になってしまうのではないかという意見もアンケートの中にあっただと思います。なので、費用がかかる部分も例えば就学援助や生活保護を受けている家庭の場合には、「こういうふうになります」みたいなものも整理していくと、保護者や子どもの安心に繋がると思うので、そこもぜひ整理していただきたいなと思います。

会長：確かにそうですね。保護者の方からすると費用というのが大きな問題になってくるかと思えます。先ほどお話あったように、学校でやる活動、あるいは施設にお願いする、そういったところでも当然費用は変わってくると思いますし、あるいはお子さんの選択というような話も出てくるのかもしれない。それを加味しながら、やはり費用の点もセットで考えていく必要があるのではないかなといったところ。その辺も実際各団体の方で、費用の面も外部指導が可能な人たちの内情について、どの程度だったらできるのかとか、その辺も是非お聞きいただきながら、外部指導者側の要望なりが見えてくると、またマッチングの話も少しずつ具体化していくのではないかなと思ったところ。その他付け加え等ありますでしょうか。それでは長時間にわたりありがとうございました。事務局の方に戻りたいと思います。よろしく願いいたします。

事務局：長時間にわたりありがとうございました。次回の協議会でございますが、2月7日（金）午後3時からを予定しております。場所は本日と同じ市役所本庁舎8-1・8-2会議室を予定しております。先ほど、池田会長からありましたとおり、次回の協議会に向けて、それぞれご指導される団体で検討事項についてご準備いただけることと存じます。もし第3回協議会にご提供いただける資料等がありましたら、事前に事務局にご連絡いただければ、こちらで増し刷りしてご用意いたします。

一点情報提供がございます。報道等でご存知の方もいらっしゃると思いますが、スポーツ庁と文化庁が設けた有識者会議の中で、「部活動地域移行は、学校から切り離す誤ったイメージが強いとして、学校を含めた地域ぐるみの取り組みを強調する「地域展開」などに改称するとしています。また、学習指導要領の解説は地域クラブの位置づけなども入れる形で年内にも見直す」としているそうです。本市といたしましては、国の動向等を引き続き注視しながら、取り組みを進めてまいりたいと考えております。

それでは最後に、副会長より閉会のご挨拶をしていただきます。よろしくお願いいたします。

副会長：協議会の委員の皆様、本日もご多用の中ご出席いただきまして、本当に貴重なご意見を賜りありがとうございました。私は途中で確認の意味も含めて、昨年から今年の協議会の流れ、そして次年度以降に繋げるロードマップの作成根拠という話を聞いて、この協議会の委員になった覚えがありますので、そこも含めてご挨拶したいと思います。まず事務局の皆さん方、本当にありがとうございました。大変なアンケートも含めたご準備をしていただいたので、今日の協議会においても、ものすごく有効な資料となり得たと思っております。また、大きな流れが本当にこの協議会において確認ができたと思えます。すごく失礼な言い方なのですが、私には遅々として進んでいるように見えなかったのですが、そこがかなり解消して、この方向でいくのだなというのを自分自身今日すごく感じたものであります。また、会長からも論点の整理とかありましたけれども、受け皿、組織ということも含めまして、あと行政上どういうところが主体を持ってどうしていくのかというご意見もありましたけれども、こちらは行政の皆さんの方にも今後いろんな課題があるのかなとも認識した次第でございます。いずれにしても、場所をどうするのか、地域とは何なのか、それから外部指導者がいろんなシステムでやっているところの折り合いをつけて、もう少しうまく流動的に動かせないかとか、今後に向けたいろいろな示唆があり、私も勉強になりました。組織の問題、費用の問題、人材の確保、育て方についても、こういうことなら可能だよというご意見もだいぶ出てまいりましたし、そんな暗くもないのかなというふうに思った次第でございます。いずれにしても、国がこういう言い方に変えたよというのを聞くと、学校がやってきた部活動ですので、その部活動の良さを先ほど山田委員が言われた言葉が適切かなと思えますけれども、学校からお願いをする方向も視野に入れて、地域のお力を借りるということで、学校も責任を持ってこの行方を見つめながら、ともにどうしていくのかということも、この協議会だけでなく行政だけでもなく、一緒に手を携えて、三者連携という言葉もありましたけれども、保護者の方々と地域の方々と学校も含めて解決していくべきことなんだということより強く思った次第でございます。ちょっと生意気な発言をしたかもし

れませんが、ご容赦いただけたらと思います。今後とも第3回に向けて事務局が大変かと思いますが、よろしくお願いいたします。ご挨拶に代えさせていただきます。

事務局：副会長ありがとうございました。以上をもちまして、第2回藤沢市部活動地域移行推進協議会を終了させていただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。